
ベッドのした（短編集）

ルモノカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベッドのした（短編集）

【Zマーク】

Z8589Z

【作者名】

ルモノカ

【あらすじ】

こちらは短編集になります。なので一話完結で、続刊物ではありません。ジャンルをホラーにしましたが、ホラーと呼べないのもちらうあるかと。

ベッドのじた

……えーっと、ちょっと待て。

あれは、何だ？ あれは？

うんうん、そうだ。これは難しい問題じゃない。むしろ簡単だ。簡単すぎて頭がパニックになつているようだ、私は。

取り敢えず最初から話すと、私は美大に通う大学生だ。性別は女。それで、だ。今日学校で、同じサークルの男の子から家に遊びに来ないかと言われて来たんだよ。まあ、普段からよく話すし、少なからず私も好意を持っていたからね、ま、いいかと。

それで今、彼の部屋に居るわけだが、私が座つている左側にベッドがあるんだよ。大学生の借りている部屋だからワンルームで結構せまい。本当、目と鼻の先だ。美大ってのはお金が掛かるからね。生活費は切り詰めるのだよ。ま、そんなことはどうでもよくてさ。

んーで、問題はそのベッドの下だ。

……いるんだよ。誰かがベッドの下に居るんだってー！ ちょっと体を傾けた時に見えてしまつたんだよーー！

目が合つてすぐに目をそらしたんだが、あれは女人だった。見間違えはない。ムカつくほど目が乳だつたからね。あれはかなりの谷間だったよ。くそつ。

……いや、違う。巨乳は関係ない。少し私情を挟んでしまった。

済まない。

よし、ひとまず落ち着くために、先ほど出された紅茶でも飲むか。

……うん、美味しいな。美味しい。

ふう、一息つけた。さて、と。ここからだ。どうする、私？

まず、ベッド下の女は誰だ？ 彼女？ いや、そんなわけはない。もし彼女だったら、私を連れ込んだ時点で激怒することはあっても、隠れる必要はない。

だとすると、ストーカー？ まあ、確率的にはストーカーだよなあ。見つかると都合が悪いから隠れているんだろうじ。

うーん。だったらまずいんじゃなかろうか、私。彼女と思われて、ストーカーに狙われたりしたら、命が……

……

よし、帰るか！ そう結論すると、

「なあ、今日はもう帰るよ」

……

と、お菓子を持ってきてくれた彼に言った。

「え、どうして？」

そう言つた彼は不思議そうだった……まあ、そうだよな。彼からすれば突然帰られる理由はないからね。

けどな、私は言つてやつたよ。

「私はお前の彼女じゃないんだよ！」

どうだ!? これで私の身の安全は保障されただろう。その代わり、彼は呆然としていたがな。可哀想に。

しかし、済まないが、彼女は別の相手を見つけてくれ。私では無理だ。今度は空手か何かを習つている女にするといいと思うぞ。

＊＊＊

後日、あれから彼とは顔を合わせていない。けどね、その代わりに私の家に警察が来たよ。彼のことを聞きにね。

で、警察が言うには彼は悪いことをしていたんだが、それがばれて現在逃亡中らしい。そしてその悪いことなんだが、それがねー、しゃれにならないもので、

……殺人なんだつてさ。

最初、ストーカー女と何かあつて、殺してしまったのかと思ったよ。でもね、それが違うんだ。

いや、あのベッド下の女が死んだのは間違いないんだけど……どうもあの時、私が彼の部屋に遊びに行つてた時点で死んでたらし

いんだよ。

美大に通つてて、彼がろう人形を作つてゐるのは知つてたけど、どうやら彼は実際に人を殺して死体のろう人形化をしていたんだと。

私が見たのはろう人形だつたんだよ。見たのが一瞬ですぐに目をそらしたから、生きている人間だと思い込んでしまつた。まあ、彼がそれだけ精巧に作り上げていた、てのもあるんだけどさ。

……よかつたな、私。犠牲者にならなくて。さつさと帰つて良かつたーー！

と、思つたぞ。その話を聴いた直後は。それはそうだろ。九死に一生を得たんだから。

だけどもだ、まだ話に続きをあって、警察は彼の手口についても話してくれた。彼は狙つた獲物を動けなくさせるために、紅茶に睡眠薬を入れるらしい。

あれ？ おかしいな。 私、 紅茶、 飲んだよな？ まさしくで疑心
が生まれたんだ。

警察が教えてくれたのはそこまでだつたんだけど、これだけの事件だ。当然すぐにニュースになるよな。で、飛び交う情報の中にこんなのがあつた。

犠牲者になつた対象はいずれもスタイルのよい女性。わかりやすく言つと、巨乳の女だ。これを知つた時、疑心が確信に変わつたね。

あの野郎、私をスルーしやがった。

……ちょっと叱りませてくれ。

「足りない部分はひとつを呪せば済むだろーが……」

はあ、はあ……すすめの涙程だが落ち着いた。

彼は今も逃げ続けているのだろう。今、この辺りの女性は戦々恐々だらうな。しかし、そのような異常事態の中……

私は安心に包まれているけどなー！

そんな私から一言だけ彼に言いたいことがある。恨み節？　いやいや違う。ホールだよ。

頑張れ、もっと頑張れ！！

ウチの家の裏手にある山。人道と呼べるものはなく登りたければ危しい獣道を行く必要がある。

小学生の頃はよく登って遊んだものだ。それで獣道から少しそれた場所に墓場がある。いつの頃に立てられたものかは不明だが、今はもう誰もお参りに来ないのだろう。全て朽ち果てていた。無縁仏といつやつだ。

これは普通の人には不気味な墓場であるのだろうが、俺は怖いと思ふことはなかった。墓場は俺が生まれるよりずっと以前からあるので、いつも山で遊んでいた俺にとっては、墓場は山にある自然の一部でしかなかった。

当時、山は俺の大切な遊び場だったので、それもあったのだろう。そこは楽しい遊び場であるという先入観が。

ただ、同居していた祖父母や両親からは耳にタコができるほど言われていた。危ないから墓場の近くでは遊びぶな、と。まあ、俺はそれをたいして気にしてなくて、黙つて山に登つては、墓の周りで遊んでいたが。

そして俺が高校生になった頃だ。友達と怖い話をしていて、俺は何となく山にある無縁仏の話をした。すると、友達の一人が言った。「それって、掘り起こしたら白骨死体とか埋まつてんのかな」と。

そこから、話が変な方向に進んでいった。友達たちが俺に確認していくように言つてきたからだ。俺は断つた。が、そうすると怖い

んだらうとからかわれる。俺もついむきになつて、「じゃあ確認してきてやるよ」と言い返してしまつた。

家に帰つてから俺はため息をついた。どうしてあんなことを言つてしまつたのかと。行つたことにして適當な嘘でもつくかと考えたが、俺の中で友達をアツと言わせたい気持ちもあつた。そして俺自身も、実際に死体が埋まつているのだろうかといつ気持ちがあつた。

俺はシャベルを手にすると山に向かつた。久しぶりに登る山だつたが、小学生の頃に覚えたことは忘れない。道に迷うこともなく、墓場についた。

昔とは違ひ、あまり長居はしたくなかったので、さっさとシャベルで土を掘り起こした。もし、骨らしきものを見つければ、証拠にするために携帯電話のカメラで写真を撮る。

今から思えば愚かなことなんだが、その時は友達に自慢したかった。その気持ちが、常識、良識、そして恐怖を押し隠していた。

俺は黙々と掘り続けた。そして掘り当ててしまつた。決して見るべきではなかつたものを。

それは俺が望んでいた死体だつた。押し隠されていた恐怖が一気に広がつた。俺はシャベルを放り捨てて、全力で逃げた。写真を撮ることなんか、頭からなくなつていた。

それどころではなかつた。逃げないと、早くこの場から離れないと。俺は家に逃げ帰ると、自分の部屋にこもり、布団をかぶつた。

そしてその日からだつた。俺が誰かに見られているような感覚を

覚えるようになったのは、どこかにある田が常に俺を見ている。しかしこの事は誰にも言えない。俺は口を閉ざした。

ずっと誰かに見られた感覚のまま日々を過ごしていたが、高校を卒業すると同時に、俺は家を出た。早くここから離れたかったからだ。

一人暮らしを始めると、誰かに見られている感覚もなくなつた。俺はホツとした。これで全て収まつたわけではないが、ひとまず落ち着くことができる。

あの時、俺が見たもの。望んでいた死体ではあったが、白骨ではなかつた。死体には肉がこびりついていた、腐りかけの。

これは死体がまだ新しいことを証明していた。しかし、俺が生まるより先にある墓場で、死体が白骨化していないわけがない。

つい最近の間に、誰かがあそこに埋めたんだ。

誰かが……

俺が逃げ帰った日の翌日、家の倉庫に、山に放り捨ててきたはずのシャベルが片付けられていた。

遠出してきたの

友達と海水浴にきてさんざん泳いだ後、疲れきった俺は砂浜に寝転んで休んでいた。

しばらくボーッと海を見ていると、若い人が海から上がりてきた。結構可愛い。いかんいかん、凝視していると下心を悟られる。俺はわざと目をそらした。

彼女は俺の横を通り過ぎる時、こう呟いた。

「痛い痛い……もう、何なのよ、ここは海は」

「痛い？ それを聞いて俺はつい彼女の方を見た。すると、彼女も立ち止まって、俺の方を見て、

「……あなたと友達になりたかった。でも無理ね。今日は体中が痛いから。遠出してきたのに残念」

と、俺に言つてきた。しかし言い終わると、またすぐに歩き出す。

ん！？ 俺と友達になりたいって？ 俺は起き上がって、遠ざかる彼女の後姿を見た。追いかけるかどうか考える。

でも彼女、体中が痛いって言つてたしなあ。夏も終わりかけだし、クラゲにでも刺されたのかな？ それなら今、追いかけて話しかけても、嫌がられるかもしれないな。でも、俺が入つてた時はクラゲなんかいなかつたよな……

「おー、ビーした?」

と、俺に話しかける声。振り返ると、海の家でかき氷を買つてきた友達が戻つてきていた。

「ああ……いや、別に」

「そりだな。今田は連れもいるしな。可愛かつたから惜しい気もするが……仕方ない。俺が諦めをつけると、友達は横に座つて、

「なあ、これ知つてるか? さっき海の家のおばちゃんから聞いたんだけど、こここの海つてさ、冬でも入りに来る人らがいるんだってさ」と、言つた。

「冬でも?」

「そう、なんか、神職に携わつている人たちが、ここで身を清めるんだつてよ」

「神職? ああ、神社とか寺にいる人たちか」

「うん、この辺りの海つて、お清めに一度いいらしい。こここの海水から取れた塩も有名らしいぜ」

「へえ、そうなのか」

うーん、全く興味がない。ここつは本当にどうでもいい情報を仕入れてきたな。

そんな俺の心情に気付かないのか、友達はしゃべり続ける。

「だからな。おまちゃんが死つてしまは、体が痛い痛い言つてゐ奴には死んでる氣をつたのつてや。塩で清められて苦しいでる悪靈だからつて」

はあー、何なんでしょうつか、お年頃とは?

それの意味って知っていますか?

ああ、そうですね、調べたら良いですね。ここは自分の部屋ですから、辞書くらいありますし。それでは、調べましょ。

……

はいはい、分かりました。ええと、幾つか意味があるようですねけど、その中の一つに女性が結婚する適齢期とありました。

うん、まあ、私は結婚するにはまだ早いかもしません。けれどもです、そういうことに興味を持つてもおかしくない年齢ではあります。なのに、相手がいません。まったくもって口惜しい。

それにですね、良い相手が見つからないのは、私が悪いわけじゃないんですよ。私自身の容姿は及第点。炊事洗濯はお手の物ですし、性格も申し分ない……たぶん。ですから相手がいないのには、別に明確な問題があるんです。それは我が家にある取り決めの一つ。

『魚釣りの上手な人としか結婚はもちろん、付き合ってもならない

これです、これ。このせいで私は不幸な人生を歩まないといけなくなつたんです。

私の家は窓を開ければ潮風を感じられるほど、海に近い場所にあります。で、家から見える所に防波堤とそれに沿つてテトラポッドが並んでいるんですけど……

そこで、魚を釣り上げた人でないと、私はお付き合いをしては駄目だと、家族みんなが言つんですね。ひどい話でしょ。

こここの防波堤は魚が釣れないと有名で、近場の人はまずここに魚を釣りに来る事はありません。無駄骨だと知つているので。

時々、それを知らずに遠方からやつて来た人が釣りをするのを見かけますが、全員ため息をついて竿をします。それくらい、ここは釣れないんです。

でも、魚はいるんです。現に今も私のお祖父ちゃんは、そこに釣りに行っています。窓から外を見れば、テトラポッドの先っちょから柄杓を使ってコマセを撒いているのが確認できます。コマセというものは撒き餌のことです。これで魚を寄せるんですけど、他の人だと、コマセをしても釣れません。お祖父ちゃんは釣りますけど。

だから、なんです。うちの家族はみんな釣りが上手いので、私が付き合う相手も釣りが上手くなくてはいけないです。

そんなの無視して付き合えばと思うかもせんが、それは無理です。釣りをしないような人と付き合おうとすれば、家族総出で妨害行為に及ぶでしょう。経験談です。あの時のバッシングとったら、もうトラウマです。

ちなみに私も釣りは上手です。バシバシ釣ります。だからそういう

う意味では、こここの防波堤で魚を釣り上げてくれる強者がいれば、その人が良いんですけどね、私も。

……

ん、だれか防波堤に釣りに来たようです。遠目なので、細かい所は見えないですが、男の人で年も若そうです。

さて、どうでしょうか。この人は私の期待に応えてくれるのでしようか？

まあ、どうせ無駄なんでしょうけど。もう、期待はしません。ぬか喜びは不快です。今まで散々味わいました。

へえ、あの人、テトラポッドの隙間に釣り糸を垂らしたようですが、これは穴釣りですか。

……うわー、地味ですねー。まあ、一応、観察はしておきましょうか。

ん？ て、あれ、竿、引いてませんか？ いや、引いてますよ、間違いないく。

男の人リールを巻くと、針に一匹の魚が掛かっているじゃないですか。私はすぐに家を飛び出しました。

この恋、逃がしてなるものか、です。

「釣れますかー？」

防波堤に着くと、そう私は切り出しました。まずは、無難に攻めます。がつついてはいけません。

「うん、そうだね。釣れるよ。ここは良いね、人が少なくて。穴場だよ」

と、男の人は返してきました。

「うーん、地味な釣りをしているだけあって、外見も多少地味な印象を受けますが、総合的に見ると悪くないです。年齢は私より五、六歳上つてところですか。大丈夫、問題なしです

そういえば、この人は私がこちらに向かつてくる間にも、一匹釣り上げていました。入れ食いじゃないですか。

断言します。この人は上手です。

その証拠に、少し先でコマセを撒きながら釣りをしている私のお祖父ちゃんですけど、こちらを気にした素振りを見せません。いつもであれば、私が釣りの下手な男の人に近づくと、ふざけるなよつて感じで睨んだあげく、柄杓を振りかぶつてコマセを投げつけるんですけど。

ふふふ。良いですね。お祖父ちゃんからもOKサインがでたといふことですね、これは。

「ここが穴場？ それは違いますよ。ここは釣れないから、この近くの人はみんな来ないんですよ」

「あ、なんだ。簡単に釣れるから穴場を見つけたと思つたんだ

けど。今日、運が良いだけなのか

「いいえ、あなたの腕が良いんです」

その言葉を聞くと、男の人は苦笑して、

「いやいや、僕は餌をつけて垂らしているだけだと、謙遜しました。」

「いいえ、そこが大事なんですよ。私はそう思います。口にはしませんけどね。」

その後しばらく、私たちは他愛もない会話を続けました。その間にも男の人は魚を釣り上げて、持つてきたクーラーボックスが一杯になるほどです。さてと、それでは時間を見計らって仕掛けないといけません。狙いは日が暮れた頃に怖い話作戦です。

夕刻、男の人が竿をしまい、帰る身支度をしている途中、私は一つの話題を振りました。

「ここが、魚が釣れないって言われているのは理由があるんですよ」

「へえ、何?」

男の人は片付けをしながら、私の話に耳を貸してくれます。

「それは以前、ここで釣り人がテトラポッドの隙間にはまつて、行方不明になつたんです。探しにくいんですよ。テトラポッドの中つて。水流が複雑で。で、死体も上がらずにそのまま」

「これを聞いて片付けをしていた動きが止まる、かと思つたんですが、男の人は淡々と片付けを続けています。私の話に相槌は打つてくれますが。私は話を続けました。

「それからです。魚が釣れなくなつたのは、同時に釣り人の幽靈が出来るつて噂が出だしたのも。この辺りでは、死んだ釣り人の呪いで魚が消えたなんて言われているんですよ」

幽靈が出ると言つと、男の人は微笑を浮かべて、

「なるほど、それは怖い。だったら日が暮れる前に帰らないとね」

男の人は、クーラーボックスを抱きました。

「あ、信じていませんね。本當ですよ。当時の新聞にも載つたんですから」

「へえ、そながらも、男の人は至つて平然としています。

と、言いながらも、男の人は至つて平然としています。

「そうですか、そうですか、信じてくれますか。だったら、信じた上で、気にしてないんですね。ここで死人が出たことも、幽靈も。

魚の詰まつたクーラーボックスも普通に持ち帰ろうとしていますし。嫌ではないんでしょうか。人が死んだところの魚なんて。

「いやいや、良いぢやないですか。實に良いです。私に相応しい相手です。これならば、家族全員に紹介しても大丈夫でしょう。

歓迎されること間違いないしです。

「また、ここに釣りに来ますか？」

と、私は聞いてみました。

「うん、そうだね。来るよ。この釣り場は僕に合っているようだから」

でしょうね。確かにここはあなたに合っています。

後日、男の人はまた釣りにやってきました。前と同じく入れ食いで、次々に釣り上げています。さぞかし新鮮な良い餌を使っているのでしょうか。

「ここはどこのよりも餌選びが難しい釣り場なんですよ。

本来なら、この場所は誰でも簡単に釣ることができたんです。死人が出るまでは。

けれども、死人が出て以降は、全く釣れなくなりました。釣り人の呪いで魚が消えた？ いやいやそんなわけではありません。

ただね、魚が味を占めただけなんです。

こきのひぬため

ウロウロ、ウロウロ……うつとーしいことだ。入つて来られるだけの知能がないから、毎日あいつらは外をうろついている。

こちらはそれを屋上から観察している。あいつらもそれを知っているからウロウロしている。時々、威嚇するように吼えながら。

殺したいんだろうな、俺たちを。

でも、無理だ。お前にこの要塞は突破できねえよ。分厚い壁に囲まれたこの要塞は敵の侵入を許さない。

だがよ、あいつらのせいで、外に出ることはかなわない。おかげで、かなり限定された自由だよ、まったく……

ああ、そうだ。俺がここで言つてているあいつらってのは人間のことだ。ただ、普通の人間じやない。知能を失つて、凶暴になつたやつらのことだ。

驚いたぜ。ある日、人が人を襲い始めたんだからな。何の前触れもなく、突然にだぜ。で、どうにか生き延びた人間がこの要塞に立てこもつてゐる、というわけだ。

どうして世界は「うなつちまつたかなあ？」下らん映画じやあるまいし。

「やあ、見張りの交代の時間だよ」

と、俺の背中から爺さんの声。

「ん、爺さんか。それじゃ交代してもらおうか。老体に鞭打たせて悪いけどな」

「いいよ、いいよ。こんな時だ、協力しあわないとね」

と、爺さんは微笑みながり言つ。人の良さそうな顔だ。

どうして世界がこうなったのか、眞実は知らねえよ。けども、だ。実は俺なりに考えていることはある。だから、この人の良さそうな爺さんでそれを確認してみるか。俺の考えが正しいかどうかを、よ。

「なあ、爺さん。ちょっと訊いてもいいか？」

「何だい？」

「爺さんがこの要塞に逃げ込んだ時、一人だったよな？」

「ああ、そうだよ。それがどうかしたのかい？」

と、爺さんは抵抗もなく素直に答えてくれた。

「いやいや、爺さん一人でよく生き延びてここまで来られたなって、ふと思つたからだ」

「いやいや、大変だつたよ。何度も殺されかけた。連れも何人か居たんだけどね。ここに着いた時はワシ一人だけになつていた」

ふうん。そうかい。連れは居たのかい。んじゃ、ちょっとカマを

掛けみよつかね、と。

「殺されかける度に、連れを見捨てたのか、爺さん？」

「」の言葉に爺さんの眉がピクリと動いた。

「いや、見捨てたんじゃない。連れが襲われている間を利用して逃げたんだ」

爺さんは無言だ。が、人の良さそうな笑顔は消えてくる。

「」の要塞に逃げて来たのも、爺さんの考えだ。爺さんは知っていたんだ。ここが侵入者に対して極めて頑強であることを。なぜなら「」の要塞に住んでいたことがあるから、過去に

「……何が言いたいんだね」

ふん、今の爺さんの口調からは警戒心が滲み出ているな。おそらくは俺の言っていることが図星なんだろ？。

「俺の考えを言おうか。俺はな、みんながおかしくなつちまつた理由はウイルスのせいだと思っている。人が人を殺したくなる殺人者製造ウイルスが蔓延したんだよ、この世界にな！」

「……映画の見過ぎじゃないのかね、それは。あまりにも稚拙な考えだよ」

平静を装いながら爺さんはそう言った。稚拙な考えか。確かにその通りだ。そりやそつさ。俺自身が稚拙な人間なんだから。

俺はここに逃げ込んできたわけじゃない。もとからこの要塞に住んでいた。決して侵入を許さない要塞……いや、脱獄を許さないこの刑務所にな！

「なあ、爺さん。みんながおかしくなったのに、俺たちがおかしくならない理由が判るか？ 判るだろ？ 俺たちや、もともと狂った殺人者なんだから、殺人者製造ウイルスなんか効きやしねえんだよ」

「……」

爺さんは無言で、その場に立ち直りしている。

「それじゃ、人が良さそうな振りをしていた爺さん。正直に答えてくれ。あんた、ずっと昔に人を殺したことあるだろ？ で、ここに収監されてたことがあるんだろ？」

「……」

「無言でことは認めるってことだぜ？」

爺さんは一度ため息をついてから、

「……ああ、私は人を殺したことがある。しかしそれは君も同じなんだろう？」

と言つた。

「ああ、同じだ。だから爺さん、俺はあんたを何一つ責める気はねえ。ただ自分の考えが正しいことを確認したかつただけだ。で、確認も済んだんで、今からやるべき事も決定した。悪いが爺さんには

死んでも「ひりひせ」

「なつ？」

俺は爺さんを抱ぐと、屋上から落とした。

ここにはもとから刑務所に収監されていた奴、逃げ込んできた奴と居るが、どいつもろくでなしに違いない。協力し合って生きるなんて有り得ねえ。

一見では、今この場所は安全に見えるだろ。見張りも順番に立てて協力し合っているように見える。外に自分たちを殺そうとしている奴らがうろついているという状況が状況だからな。

しかしそれも終わる。理由は食料が尽きるからだ。だつたら俺たちのすることとこやあ、自分の食料の確保のために、他を殺すことだ。

下の方が騒がしくなってきやがつた。潰れた爺さんを見て、みんなのたがが外れたようだ。

さてこれから盛大な殺し合いが始まる。外に居ても中に居ても生き残るのは大変だぜ。

私は路上で占いをしている。それが職業だからね。まあ、自分で占いのもなんだけど、よく当たると評判で、一回に一回は当たっているかな。半分も当たれば占い師としては上出来で、そこそこ稼ぎも出している。

でもねえ、今日はちよつと困ったよ。といつのも、今までにない占いの結果が出てしまってね。それは占いに使う水晶球にお客さんガ血だらけで死んでいる未来が映し出されてしまつて。しかも一人のお客さんから。

これは、どうしたものかと。おそらく殺されてしまつたのだと察しあつくけど……占いも完璧じゃないから、そこまで深くは見えないんだよね。これが一回に一回は外している原因でもあるけどや。

それにしたつて、これまでの経験から考へると、どちらか一つは当たることになるけど。つーん、近く、通り魔でも現れたりするのかな。で、運が悪い方が殺される、と。

もつとも一人とも殺される可能性もあるけど。その方が私の占いの的中率も上がるし、嬉しいといえば嬉しい。

ああ、ちなみにお客様には正直に教えてあげたよ。近いうちに殺されますよつて。そしたら、一人は若い女のお客さんだったけど、小刻みに震えながら去つて行つたね。

もう一人は男の人で、こちらも若かった。占いの結果を聞くなり、私に掴み掛かるとしてきたからびっくりしたよ。殴られるかと思

つたけど、私が女だから、それは思いどおりだったみたい。険しい顔のまま去つて行つたよ。

さて、と。そろそろお密せんも途切れてしまし、この辺で仕事を切り上げて家に帰ろうかね。

夜遅く、私は自宅に戻ると深くソファに腰掛けた。占いは疲れのんだよね。集中力を要するから。

とりあえず、リモコンを手にしてテレビをつけると、ニュースをやつていた。内容は彼氏の浮気に逆上した彼女が、彼氏を刺し殺すという内容だった。

あら、ひ、ひの名前は……

私はこの加害者と被害者の名前に聞き覚えがあつた。そう、今日、占いにきて、殺される未来が映つた一人だ。

そうか、なるほどねえ。彼女が彼氏を殺した。けれども、逆に彼氏が彼女を殺す可能性もあつた。それは身を守るためかもしれないし、彼女を殺して浮氣相手のところへ行きたかったのかもしれない。

だから私の水晶球には一人が殺されている光景が映し出された。可能性としてね。でも、現実には殺される側と殺す側に分かれるので、どちらかは生き残る。

うーん、相も変わらず、私の占い的命中率は一回に一回か。ま、よしとしよう。

もし、一人とも生き残るのであれば、私が通り魔になつて、殺し

ておかないといけないこと」なんだつたから、ね。

ついてない？ そんなことないよ

「……ほんとに、あんたつてついてないわよね」

と、友人の言葉。呆れた様子で私を見ながら、目の前の「コーヒー」に口をつける。

休みの日。会社の同僚でもある友人に誘われてやつてきたファミレス。友人は、何やら私に物申したいことがあるようだけど。それが何かは、おおよそ察しがついている。

「あの、私は自分がついてないとか思つてないんだけど」

私は反論した。それを聞くなり、友人はため息。

「あんたねえ、今までどれだけ宝石強盗に出くわしたと思つているのよ。ねえ、そうでしょ？」

若干だけど、友人が語氣を強める。どうあっても私を説得したいらしい。けど、私たつて退くわけにはいかない。たとえ友人の言葉が好意からだとしても、好きでやつていることを止めるのは難しいからね。

「だつて別に、私が宝石強盗の被害にあつたわけじゃないし」

そう、私は被害を受けていない。受けたのは私が訪れた宝石店。

「そうね、確かにあなたは何一つ盗まれたわけじゃない」

友人は思いのほかあつさりとそれを認めた。

「でしょ」

私は笑顔になる。

ドンッ！

直後、友人が両手をテーブルに叩きつけた。その衝撃でコップが揺れて、中のコーヒーが波打つ。慌てて自分と友人のコップをこぼれないように掴む。

「あ、危ないって、落ち着いて」

「落ち着いていられるか！」

激高した友人に、思わず私は仰け反った。

「ほら、他のお客さんもいるから……穩便に、ね」

頼むから落ち着いてほしい。みんながこっちを見ている。かなり、恥ずかしい。

「あんたね、もし宝石強盗の人質にでも取られたら、どうするつもりよ？ ねえ、どうするの？ 答えなさいよ」

私の恥じらいなど関係なく、友人はまくし立てる。とりあえず友人を落ち着かせようと、私は言葉を返した。が、

「大丈夫よ、人質になんて取られないから」

「」の軽はずみな返しに、友人の眉間にしわが寄ったのを確認できた。私は後悔したけど、もう遅い。

「人質にならない保証なんてないでしょー。」

「ああ、だから、そのせ」

「大体、私たちは、しがない〇しなのよ。まあ、女として宝石が好きなのは理解してあげる。でもね、いつもいつも宝石を見にいったところで買えやしないでしょーが！」

「まあ、そうだけじゃ」

たしかに〇〇の給料は安い。そこはおっしゃる通りで、日々上げてほしいと願っている。

「それに、あんた、会社じゃ怒られてばかりじゃない。このままじゃ給料下がるわよ」

「どうやら、下がる」とはあつても上がるとははないみたい。残念なことだ。

「いや、最悪、あんたの働きぶりじゃ首もあるわよ」

首、友人なのに酷い言いようだ。会社での私に対する友人の見方を今知った。そんな風に思われていたなんて。

「ねえ、私たち友達だよね？」

一応、確認してみる。

「友達よ。だから心配しているんでしょ。」

心配してくれるなら、優しくしてよ、と思つ。

「厳しいのは嫌だな、私は。優しさがほしい」

「優しくしていたら、これからも宝石店にいくでしょうが」

「いや、それは厳しくされてもいくと思つ」

「……何ですって？」

いけない、また失言をしてしまつた。友人の顔が、見る見るうちに紅潮していく。これから私は延々と友人からお説教を聞かされることになるかも、いや、きっとなる。この世話好きの友人は私を逃がしはしない。

ああ、せつかくの休みが台無しだ。私は宝石店巡りで一日を有意義に過ごしたかったのに……

私は休みの日はもちろん、会社のある日だって外回りを利用して宝石店に赴いては時間を潰す。もちろんその後、上司に呼び出されるけど。

そして私はけつこう確率で宝石強盗に出くわす。友人はそれを心配してくれている。その気持ちはありがたい。けどね、本音のところはね……余計なお世話といつ表現が当てはまるんだよね。

下を向いて、反省する素振りを見せながら、友人をちらりと見る。当分、怒りが収まる気配はない。参った。本当に参った。もう余計なことは口に出さない。お説教が長くなるだけだから。

仕方ないので、今日のところは、宝石店巡りは諦めるにしても、この後、絶対に外せない約束があるんだよね。そのためにも早く終わってほしい。どうせ私は心から反省なんてしないし。

「ねえ、さつきから黙りこくれているけど反省してるの？ もしかして聞き流したりしてない？」

「う、反省してないのがばれている。

「し、してるよ。それはもう、物凄く」

慌てて弁明するが、友人の田は私を疑っている。まずい、お説教が長くなりそうな雰囲気だ。

震えが止まらない。緊張している。俺はコートの中に手を入れた。

大丈夫だ、準備は万全だ。

「コートの中には拳銃が一丁。モデルガンだが。それと、ショーケースを割るための金槌と丈夫な革袋。

よし、後、必要なのは勇気だ。頑張るんだ、俺。強盗を成功させ

るためのマニュアルは、穴が空くほど読み返したじゃないか。きっと上手くいく。

ポケットからマスクを取り出す。覚悟を決めて、それを被る。今更、後には退けない。前に進むしか道はない。唾を飲み込んで、ドアに手を掛けると、俺は店に入った。

「動くな！ 手をあげろ！」

入るなり、俺はモデルガンをかざして、そう声を張り上げた。これが肝心だ。最初に恐怖を与える必要がある。と、マニュアルに書いてあった。

俺は店内を見回した。数人の店員と、客は若い女が一人いる。この間に客が少ないのはマニュアル通りだ。だが俺は、ここで妙なことを一つ発見した。

店員はみんな大人しく手をあげている。それは俺の思い通りだ。ところがだ、客の若い女はどうしてか壁に寄り掛かってゼエゼエと息を切らしている。

何だ、あの女は？ 恐怖のあまり過呼吸にでもなったのか？ 俺は女を注視した。女もこちらを見ていたが、呼吸を落ち着かせると、氣だるそうに両手をあげた。

……もしかして、疲れていただけなのか？

少し見合つて、女は俺から目をそらすと、なぜか天井に目を向いた。天井にあるもの、そこで俺は我に返り、マニュアルを思い出す。

そうだ！ 監視カメラを止めないと。俺は店員の女に近づいた。

「監視カメラはどこで撮ってるんだ？ 案内しろ」

店員は怯えた様子で奥の扉を指差す。俺は強引にその手を取ると、周囲を牽制した。

「おい、誰も不審な行動はするなよ。すれば、この女を殺すぞ。」

……誰も動く気配はない。俺は店員を連れて、カメラを止めにいく。これで第一段階終了だ。

次は、ショーケースの中の宝石を盗むこと。俺は金槌を取り出すと、手当たり次第にショーケースを割り始める。ある程度割ると、今度は宝石を袋に詰める。

「ん？」

俺は不審な気配を感じて振り向いた。そこにはさつき息を切らしていた若い女がいた。

「……お前、動いてないか？」

俺はモデルガンを向けてそう尋ねた。

「動いてないよ

と、いつの間にかおひじっていた両手をあげて女は答える。

動いてない、か……いや、動いている。それきまでその女はそこ

にいなかつたはず。俺は女を睨んだ。女は両手をあげて降伏している構えを見せているものの、怯えた様子は感じられない。正直、気に掛かるし、気に入らない。

しかしだ、マニコアルには、客の些細な行動は気にするな。と、書いてあつた。気にしている間に、仕事を済ませると。

その通りかも知れない。自分の命を危険に晒してまで、立ち向かう人間はそうはいらない。しかも体格に恵まれた男ならまだしも、華奢な女だ。たとえ襲いかかってきても、どうとでもできる。俺は袋に宝石を詰める作業に戻った。

よし、このくらいで十分だろ。取り残している宝石はまだあるが、全部取つてやろうと思つほど強欲になつてはいけない。これもマニコアル通りだ。

「お前、ついてこい」

俺は最初に監視カメラの部屋まで案内させた店員を引っ張つて、外に止めてある車に向かつ。店員は人質だ。

誰を人質にして、どのルートで逃げるか、全てマニコアルに書いてあること。ここまで何一つの問題もない。数時間後には俺は金持ちだ。そう思つと、胸が高鳴る。

いけない、いけない。まだ仕事は終わつていない。気を緩めては駄目だ。逃げながら俺は人質に言い聞かせる。下手な抵抗さえしなければ、殺しはしない、と。

すると、人質は言った。「逃げられませんよ」と。

俺は、一笑に付した。「いつ、店にいたときは法えていたようだが、今はやけに強気じゃないか。恐怖でおかしくなったか、それとも俺を追つてくる警察でも信じているのか。

だけどな、捕まるものか。俺にはマニュアルがある。そして、それを俺に与えた組織が後ろについている。俺が捕まれば、組織のことを全て警察に話す。となれば組織は壊滅だ。だから、組織は俺を必ず逃がす。どんな手段を用いても。

俺も馬鹿じゃないんだよ。

ようやく友人からも解放されて、晴れて自由の身になった。でも残念なことに、一日の半分近くをお説教されることに費やしてしまい、もうすぐ日が暮れそうだ。

「やばい、間に合わないかも」

私は繁華街を走る。この時間、買い物を済ませて家に帰る人が多く、今から繁華街の中心部に向かう私とは反対方向になる。なので、それ違う人が邪魔で仕方がない。携帯電話の時計で約束の時間を確認。もうそんなに余裕はない。

「あああ、もう、あんなにお説教が長いなんて」

もし間に合わなければ……それはもう大変なことになってしまう。

どれだけ大変かというと、とりあえず私が行方不明になるほど。行方不明のその先は、想像したくない。

「あつた、あの店だ」

私は勢いよくドアを開けて、店内に入る。店内は落ち着いた雰囲気で、ショーケースには色とりどりの宝石が並んでいる。私は辺りを見回すと、店員以外には自分しかいない。店員は慌てて入ってきた私に戸惑っているのか、反応がない。

「い、いらっしゃいませ」

妙な間が空いた後に、店員の一人が声を掛けってきた。でも私はあまりのきつさに返事も返せず、ふらふらと店の奥に足を向ける。

間に合つた、のかな……そう思った瞬間だった、誰かがドアを開けて入ってきた。

「動くな！ 手をあげろ！」

マスクを被つた男の怒声が店内に響き渡る。手には拳銃。誰が見ても宝石強盗でしかあり得なかつた。よかつた、ぎりぎり間に合つたみたい。

男は私に気付くと、怪訝な表情をした。それもそうだ。私は宝石店の壁に寄り掛かって、なぜか肩で息をしているのだから。

でも、そんなことはどうでもよくて、男は宝石強盗といつやるべきことがあるんだから、私のことなんか放つておかない。

仕方ないなあ。私は、天井に目を向けた。天井の四隅には監視カメラが設置されている。男もつられて天井を見て、ハツとする。

「監視カメラはどこで撮ってるんだ？ 案内しり」

と、男は店員に詰め寄る。そうそう、まずは監視カメラを止めにいかないとね。

もつとも監視カメラはリアルタイムで警察なり警備会社なりに映像を送っているから、今さら止めても無駄なんだけど。ま、それでもやつてもらわないと私が困るんだよね。

カメラを止めると、次に男はショーケースを金槌で割り始めた。乱暴に割る様を見て、私は気が気ではない。

ああああ、宝石にまで傷がついちゃう。もつと丁寧にしないと。男はその後も、無造作に宝石を掴み、砕け散ったショーケースのガラスごと袋に詰めていく。

ああ、あつ、このままじゃ、宝石が駄目になる。我慢しきれずに、私はその場から動いてしまった。が、すぐに私の動きを察した男が振り向いた。

「……お前、動いてないか？」

と、男は言った。はあ、どうして気付くかな、鈍そうなのに。それに気が付いても相手しちゃ駄目でしょ、私の。

「動いてないよ」

私はそう言いつと、両手をあげた。ほら、無抵抗のサインを示したんだから、さう さと自分の仕事に戻つてよ。が、男は気になつて仕方がないのか、私から目を離そつとしない。

……あのー、警察、きちゃうよ？ と、伝えたい。でも、余計な刺激はしない方が無難かな。それは先ほど友人のやり取りで学習した。結局、男は私に対してもする事ではなく、宝石の袋詰めに戻つた。私は一息つく。

「お前は人質だ。こつちにこい」

袋詰め作業を終えると、男は店員の女性を人質にして、外に出た。その間、他の店員はみんな、連れ去られる女性に目を奪われていた。

今がチャンスだ！ 私は自分に与えられた任務を迅速に行う。友人の知らないもう一人の私がここにいる。できることなら教えてやりたい、こんなにもテキパキと働く私のことを。絶対に教えられないけどね。

さて、と。私の任務は滞りなく無事完了。後は連れていかれた人質さん次第。でも大丈夫かな、人質さん、随分と線の細い女の子だつたけど。

真夜中。私は自宅に帰つて、適当にくつろいだ後、外に出た。目的地は繁華街を抜けた先にある住宅街、その外れにある古びたアパート。

私は付近に人がいないのを確認してから、一階にある一室のドアをノックした。立て付けが悪く、隙間から薄っすらと中の光が漏れている。

「……どうだ？」

中から、囁つた声が聞こえてきた。

「失礼します」

入ると、そこは埃っぽかった。歩けば腐った床板が軋んで、いつ穴が開いてもおかしくない。私は足元に気をつけながら恐る恐る進む。

「こりつしゃー」

と、主の声。主は体中に深いしわが刻み込まれたおじいさん。ゆらゆらと部屋の中央でロッキングチェアに揺られて気持ちよさそうにしてくる。

ロッキングチェア以外には何もない、生活感のない部屋。当然かな。ここは引き渡しに使うだけの場所だから。

私はもう何度もここでおじいさんと会っている。にもかかわらず、まだおじいさんの本名を私は知らない。名前を聞けば答えてくれるけど、たぶんそれは偽名。聞く度に違う名前を答えるし。でも、事に差し支えはない。

私が近づくと、おじいさんは優しい口調で、

「上手くいったようだね」

「はい」

私は、服のポケットから数点の宝石を取り出す。これは男が取り残していった宝石を、私がこいつそりと回収したもの。宝石をおじいさんに渡す。おじいさんはそれを丹念に目利きする。

「少しだが……傷があるね」

「おそらくショーケースを割ったときにガラスが当たったんです。私のせいじゃないですよ。あなたが雇った男が乱暴だつたから」

「くつぐ、そうか、それはすまなかつたね」

おじいさんは笑う。それに対しても私は、

「今度はもう少し、質の高い人材を用意してくれると助かるんですけど。今日の人は、ちょっと仕事がやりにくくて」

「うーん、そつは言つてもねえ。殺され役だから頭が回る人はやつてくれないんだよ。自分が殺されることに最後まで気付かない程度の人じやないと」

おじいさんは懐から封筒を取り出すと、私に手渡した。封筒にはお札が入っていて、ざつと数えると二つやら少し色をつけてくれているみたい。真面目に働いているから、褒美かな。

「これからも頼むよ。君は仕事ができるので非常に助かるよ

「はい、ありがとうございます」

私は素直に感謝した。文句は言つても、このバイトは〇・しよりも段違いに儲かる。今ではこっちが本職で、〇・しがバイトになつているくらい。だから〇・しは辞めても、こっちを辞める気はない。私に〇・しの才能はなくても、こっちの才能はある。

そもそも、このおじいさんと知り合つかけになつたのが、私がスーパーで万引きしているところを見られたから。でも、おじいさんは私を警察に突き出すことはせずに、仕事を持ち掛けってきた。

仕事の内容は宝石強盗。分担制でそれぞれにマーカーとアルがある。私に与えられた役目は、今日のように隙を突いて宝石を盗むこと。

後、もう一つ役目があつて、それは殺し役と殺され役。殺されるのは宝石強盗の実行犯。まあ、あの男のことなんだけどね。男に全ての罪を着せて殺してしまう。そこで、殺し役が必要になる。それは人質として連れていかれた店員の彼女。彼女が正当防衛として男を殺す。殺すついでに証拠隠滅もしておぐ。

「……ただ今、戻りました」

気配も感じさせず、突然後ろから声が聞こえた。振り向くと、人質の彼女が立っていた。

「どうだつたかね？」

おじいさんが彼女に尋ねた。

「はい、予定通り彼は車」と海に沈んで死にました。奪った宝石も海に散つたので全てを探すことはできないでしょう」

彼女は、私を見て、

「Iの方が取つた宝石も海に沈んだと思われるため、警察にしつこく探せることもなく、売買しやすくなるかと思います」

「ふむ、上出来だ」

おじこさんはまた懐からお金の入つた封筒を取り出すと、今度は彼女に渡した。

「……あつがヒヅケモア」

と、彼女は小さく呟いた。おじこさんは、私と彼女を見て、

「それでは直たち、また仕事があれば、Iから連絡しよう。それまでIのリストを渡しておくれから下調べをしておいてくれ」

私たちリストを受け取つた。リストにはこれから襲う計画のある宝石店の名前が羅列されてある。私が宝石店巡りをしていくのは、このため。宝石を眺めながら店の聞き取りを調べる。本番で少しでも自分が動きやすくなるよう。アリ

「では、また仕事のときにおつか

せう幅つと、おじこさんはロッキングチャラーから立ち上がつた。

「はい」

私たちは同時に返事をした。

家路につく途中、私は携帯電話でネットに接続した。とあるサイトに田を通す。そこではあのおじいさんが殺され役を募集している。もちろん殺され役とは言わずに、おいしい話を持ちかけるようにして。

ん、誰か知らないけど、乗り気な人がいる。次の仕事もそう遠くないかも。

0時を過ぎた深夜、寝苦しさのあまり僕は目を覚ました。

秋も中ごろに差し掛かっている。普段なら、やや寒さを感じるほどだ。なのに、なぜだろうか。今日は妙に蒸し暑い。

僕はベッドから起き上がると、冷蔵庫に向かった。汗を搔いたせいで、寝巻きが体にまとわりついて気持ち悪い。

冷蔵庫を開けると、思わずため息が出た。何か冷たいものを期待していたのだが、中は空っぽだった。

それもそうだ。アパートに一人暮らしのサラリーマンだと、冷蔵庫を活用する機会はあまりない。仕事帰りにそのまま必要なものだけを買って帰るだけだ。

ビールくらいはまとめ買いしておぐものだと思いながら、僕はコンビニへ行くことにした。

寝巻きを脱ぎ捨て、先日もつ必要ないとタンスにしまった半袖のシャツを引っ張り出す。携帯電話を手に取り、シャツのポケットにしまつと、外に出た。

あれ？ 道中、僕はあることに気付いた。携帯電話の日付が狂っている。

今日は2010年10月23日のはずだが、携帯電話の日付は2012年8月2日になっていた。おおよそ2年弱、時間が進んでい

る。

……故障、か？ まあいい、後日、買った店に問い合わせてみよう。それにしても暑い。本当に8月2日だとしてもおかしくない暑さだ。

10月後半にしては不自然な暑さだが、異常気象といつ言葉にはもつ含まれている。こういう日もあるのだらう。

コンビニに着くと、ドアを開いた。その拍子に冷気が僕の体を通り抜けて行く。さすがにこれだけ暑いと、この季節でも冷房を入れるようだ。僕は少しだけ立ち読みして涼んだ後、缶ビールを1本手にして、レジに置いた。

会計の途中、店員の制服が半袖であることに気付いて、僕は眉をひそめた。いつもなら制服は長袖だったはず。今日が特別暑いからといって、冷房もついているのに、わざわざ半袖に着替えたのだろうか？

僕は普段なら受け取らないレシートを受け取ると、コンビニを出た。そして、レシートに印を通す。レシートの印は2011年8月2日だった。携帯電話と同じ印付。

…… 一体、どうなっている？

「コンビニを出てから僕は家に戻り、公園のベンチに座つて考

えた。今日が2012年8月2日だということについて。

落ち着かせる意味も込めて、缶ビールに口をつけた。ところが、口にビールが流れ込んでくることはない。すでに飲み干していた。舌打ちをして、ベンチ横のゴミ箱に空き缶を投げ入れる。カラランカラランと空き缶は音を立てた。

「おや、こんな時間に人がいるなんて珍しいこともあるものだ」

少し先から声が聞こえてきた。僕はその方に顔を向けると、外灯に照らされてスーツ姿の初老の男が立っているのが見えた。男はこちらに近寄つてくると、僕の隣に座つた。

「私は今日ここで待ち合わせをしているのだが、まさかこんな夜更けに人がいるとは思わなかつたな。が、構いやしないか、人がいても。今さら見られて困るものではないしな」

男はそう口を開くと、夜空を見上げた。僕もつられて見上げると、視界に満月が入つた。それはどこか妙な満月だつた。

模様が違う、のか。兎が餅をついていとはよく聞くが、今見ている満月にそのような模様は見当たらない。

「……月に宇宙人が住み着いてから、情緒ある月は過去のものになつてしまつたな」

隣に座つていた男が、唐突に想定外のことを言つた。

宇宙人？ この男は何を言い出すのか？

いや、待て。この男の顔、どこかで見た気が。そうだ、テレビの討論番組などでよく見かける有名な科学者の人だ。若干、テレビよりも老けて見えるが間違いない。以前、番組で宇宙人が存在しない理由を理路整然と説明していたのを、僕は思い出した。

それにしても、宇宙人が月に住み着いたとは……そのせいで、月の模様は変わったとでも？ 詳しく聞いてみよう。

「あの、月に宇宙人つて？」

「何だ、知らないのか。連日連夜、ニュースでやっているだらう」

「そう言われても、目を覚ましたら時間が一年ほど進んでいた自分が知るわけはない。」

「まあ、いい。簡単に説明すると、少し前に月で宇宙人の存在が確認された。宇宙人はもとから月に住んでいたのではなく、どこからかやってきたものだと考えられて、今は人類が総力をあげて、コンタクトを図っている」

「知らないうちに時間が一年過ぎたと思えば、今度は宇宙人。僕は一つの答えを出した。これは夢だと。」

「夢なら慌てる必要はない。目を覚ますまで、隣の科学者と会話でもして時間を潰していればよい。」

「これからどうなりそなんですか？」

「人類としては友好を掲げて接していくつもりだらう」

「そうですか。それはよかつた」

「……よいかどうかは、相手次第だな」

そう言つた科学者の口調は重かつた。

「相手次第つて？」

「今、月の土地を売つていた会社が、月の土地を買った者たちから訴えられている。理由は自分たちが買った土地を宇宙人が無断拝借している、ということらしい」

月は誰の土地でもないので、勝手に月の土地を売る会社が存在していたことは知つていた。それにしても、月の土地の所有を巡つて争うなんて夢のない話だ。

「どんなものかもしれない宇宙人相手に友好を謳つてゐる影で、小さな争いが起きてゐる。しかも人間同士の間で、だ」

科学者は言葉に力を込めるが、この話から、何を伝えたいのか僕には理解できない。

「ええと、あまり意味が……」

「人間を人間として扱つてくれるのは人間だけだということだ。それなのに、人間同士でさえも争い、いがみ合つのが現状だ。友好とはね、とても難しいことなんだ」

科学者は再び夜空を見上げた。今度は満月ではない。遠い空で揺ら揺らと動いている光球を見つめている。

「それにマスコミたちは連日、私の家に押しかけては、これまで私が宇宙人は存在しないと主張してきたことに対して、現在の心境はどうなのかと尋ねてくる」

科学者は立ち上がった。光球がこちらに近づいてきている。

「私だつて知つていたさ。宇宙人が存在することくらい」

光球が目の前までやってきた。光球の正体は光り輝く宇宙船だった。

「さてと、それじゃ私はいくよ」

鈍い音と共に宇宙船のドアが開かれて、そこから若い女性が姿を現した。

「え、あ、ちょっと？」

「この宇宙船は何なのか、僕は科学者に追いすがろうとして立ち上がるが、科学者は振り返った。

「私もね、宇宙人なんだよ。人間の振りをして、宇宙人は存在しないと言つてきたがね。人間がそう思つてくれていた方が、私たちはこの星で安心して住むことができたんだ」

科学者は自分が宇宙人であると告げた。僕は呆気に取られて言葉を返せない。

「今、思えば妙な話だな。宇宙人である私が宇宙人は存在しないと

主張し、宇宙人を見たことのない人間たちが宇宙人は存在するとテレビで討論していたことは、

科学者は笑みを浮かべた。僕はまだ聞きたいことがあつたが、上手く口が回らない。あたふたしていると、それを見透かしたかのように、科学者が先に口を開いた。

「私はね、元々住んでいた星がなくなつてしまつたから、地球まで逃げてきたんだ。だがね、今からこの地球からも逃げる。これがどういう意味か分かるかい？」

「意味って、ええと……それは月に宇宙人が住み始めて、皆が宇宙人の存在を知つてしまい、住み辛くなつてきた……とか」

僕の答えに、科学者は寂しげに首を横に振つた。

「私の星がなくなつてしまつたのはね、とある宇宙人に侵略されたからなんだ」

「え？」

男は満月を指差した。そして、宇宙船の中に消えた。

朝、目覚めると、僕は携帯電話を見た。

2010年10月23日。

……夢か。そうだよな、当然だな。

僕はいつもと同じようにスーツに着替えて、会社に出勤し、働いて、その帰りにコンビニで夕飯と缶ビールを買って帰った。変化のない同じ毎日。

アパートに着くと、とりあえずテレビをつける。そこでは討論番組をやっていた。討論内容は宇宙人が存在するのかしないのか、というもの。

夢と同じ科学者が若い女性の助手を引き連れて、宇宙人は存在しないと主張している。

思わず僕は窓を開いて、夜空を見上げた。

今日は満月。

……今はまだ、兎が餅をついている。

2012年8月2日（後書き）

これ作ったのがかなり以前なので、現在月の土地の売買がどうなつているのかは知らないです。

あと、もともとのタイトルは2012年7月30日だったのですが、「あれ、その日満月じゃなかったのか」と気づいて、2012年8月2日に変更しました。

おふくろの味

子供の頃、学校の帰り道でカエルを見つけて持つて帰った。母に見せると、それだから揚げを作ってくれた。美味しかった。

子供の頃、屋根裏でネズミを捕まえた。母に見せると、それから揚げを作ってくれた。美味しかった。

子供の頃、自分に懐いてきた野良犬を家に連れて帰った。母に見せると、それでから揚げを作ってくれた。美味しかった。

子供の頃、父と遊んだ。遊び疲れて動かなくなつた父を母に見せると、それでから揚げを作つてもらつた。美味しかった。

今、僕は大人になつていて。おふくろの味は何かと聞かれて、これらのこと思い出した。

私には一人息子がいる。だけど、産んだのは失敗だつた。子供の世話など、煩わしいだけだつた。

ある日、息子がカエルを拾つてきたので、むしゃくしゃしていた私は目の前でそれを殺して、から揚げにすると、息子に食べさせた。同じように、ネズミや犬の肉なども食べさせたことがある。ところが息子は泣きもせず、怒りもせず、ただもくもくと食べる。この子は生来頭がおかしいに違ひない。

息子が視界に入るたびに苛立つ。こんな気持ち悪い子を産みたいわけじゃなかつたのに。とうとう我慢ができなくなつて、私は旦那に息子を殺すように言つた。これ以上、私のそばにいてほしくない。包丁を持つた旦那は震えながら息子の部屋に行つた。数十分後、息子が血だらけの旦那を引きずりながら私のところへやつて來た。

息子は言つた。「お父さん、遊んでいたら動かなくなつた。だからいつものようにから揚げにしてくれる？」と。

遊んでいたら？ いつものように？ もしかしてこの子は私が力エルやネズミや犬を殺しているのを遊んでいると勘違いしていた？

私は恐怖に駆られた。息子が怖くてどうしようもない。逆らう勇気などなく、私は旦那の肉でから揚げを作らされた。

以降、私は息子のために様々ながら揚げを作らなければいけないことになる。息子が大人になつた時、私は廢人になつていて。でも良かつた。精神病院に収容された私は息子のためにから揚げを作る必要がなくなつたのだから。もつ、この手で血抜きをして肉と骨と内臓を分けなくてもいい。

終わった……ようやく……

私は好きな男性に、おふくろの味は何か尋ねてみた。その男性はから揚げだと答えた。料理に自信があつた私は、「じゃあ、からあ

「作ってあげる」と言った。それを聞いた男性は「ちょっとこれから病院行ってくる」とだけ答えて立ち去った。

……これは振られてしまったのかな。いきなり手料理なんて強引過ぎたかも、はあ……

幼なじみ

高校一年の時、好きでもない男性と付き合い始めて一年が経った。未だに好きになれないけど付き合っている。でも、これも一つの道だと私は思っている。

私の幼なじみに麻奈まなという子がいる。麻奈はずっと好きな男性を想い続けていた。その男性は、私と麻奈の幼なじみで名前を神さかみと言つた。他の女性を見ている神がこちらを振り向くまで、麻奈はただ待つてはいる。私とは方向が違うけど、これも一つの道なのだろうと思う。

ある日、私は麻奈と他愛もない会話をしている最中に、一つのオカルト話をした。ウチの地元にはオカルトで有名な山さんがあるのだけど……

その山には言い伝えがあつて、ずっと昔、山に住む鬼にさらわれた姫を、許婚であった男が助けに入つた。男は鬼を追い払つてなんとか姫を助けだしたけど、鬼をしとめるまでには至らなかつた。以降、鬼は山に一人で立ち入つた女だけを殺すようになつた。そばに男が付いていれば手出しあはしない。

これは都市伝説として現在にも伝わつていて、だからか、この山には女の自殺者が多い。自殺者を鬼の仕業と考へる人も中には居るけど。

私は麻奈に言つてみた。一人で山に行つてみてはどうかと。そこで確認したらしい。神が助けに来るかどうかを。來るのであれば、二人は結ばれる可能性もあるかもしれないのだからと。

その数日後、麻奈は家に戻らなくなつた。心配した榎は私の元へ来て、麻奈について何か知らないかと尋ねてきた。

私は素直に答えた。麻奈は山に行つたと。榎は激昂した。どうしてそれを止めたのかと問い合わせてきた。私はため息をついた。榎は昔から私たちに対する過保護なところがある。

三人の幼なじみ、そこで一人だけ男なのだから、そうなるのも仕方ないのかもしれないけど、そのせいで麻奈が榎から離れられなくなつたとなぜ考えられない？ 無神経に榎が麻奈を大切にし過ぎた。それこそが麻奈が山に行つた原因なのに。

榎は山に向かつた。そこにまだ麻奈は居るだろうか？ 居たとして連れて帰つてこられるだろうか？ 所詮、都市伝説なんてものは事実ではない。鬼なんて居ないことは、一年前のあの日から私は知つていてる。

翌日、好きでもない私の彼氏が、私の元へ来てこう言つた。「埋めてきた」と。これをしてくれるほど、私に夢中にさせるのに一年かかつた。

手に入れたくても入らないものなら、誰の手にも渡らないようにするのも一つの道だと、私は思う。

口ボット、ですー！

時代が進み、科学が進歩した現在。ネットショッピングでロボットが買えるようになった。ロボットは主に人間の身の回りの世話をするために作られ、人間が馴染みやすいように、人型に模し、性別や性格なども一体一體きちんと設計されている。

それで、ですよ。僕も炊事洗濯をしてくれるロボットが欲しくて今、モニターを見ながら探しているわけだけども、正直どれを買うべきか悩んでいる。原因はどのロボットも可愛くて迷りてしまうから。

ああ、ちなみに僕は男なので買つロボットはもう少しひん女性型ロボットになる。男なら当然だよね。

うーん、それにしてもどうするかなあ。何かこう、後もう一押ししてくれるロボットはいないものか……ん、これは何だ？ めおおおー！

そこは初めて訪れた店だつた。特に考えなしに新商品のコーナーをタッチすると、非常に可愛らしいメイド服を着たロボットが映し出された。ロボットを人間に例えるなら女子中学生くらいの年頃か。

……いや、それにしても可愛い。僕は画面に釘付けになつた。ビデオチャット機能で、このロボットの実際の動きを見ながら会話することができる。僕はさつそく試してみることにした。

「もしもーし、聞こえますかー？」

「は、はい！… ぱつちり聞こえます！… 私の名前はヒナタ…！ 正真正銘のロボット、です！…」

と、ヒナタと云つた前のロボットは元気な声で返事をしてきた。
おお、健康的な声。さうに可愛くなつたじゃないか。

「それじゃあ、ヒナタ。メイド服を着てるつてことは、君は炊事洗
濯とか代わりにしてくれるロボットなのかな？」

「いえ、私は炊事洗濯なんてできません！… メイド服は密寄せ、
です！…」

密寄せつて……正直だな。でも、その正直さも可愛いよ。

「あ、そつなんだ。じゃあ、君にはどんな機能がついているのかな
？」

「私の電池寿命は少なくとも50年以上、です！…」

「へえ、それはすく長いね」

大抵のロボットは頑張つて10年ほどだから、50年持つのは別
格だった。

「だけど精密機械の上、あまり頑丈に作られてないので、すぐ壊れ
ちゃつたりするかもしれません！… なので私をお買い上げになら
れても保証書はつかない、です！…」

……いきなり電池寿命の優位性を打ち消してしまった発言だね。ここ
の会社、名前すら聞いたことないけど、何を考えてこれを開発した

んだろう。精密機械だからこそ頑丈に作りつよ、ねえ。

「しかあーし…… その分お求め安い価格となつております……」

ヒナタは大きさな動きをしながら、自分の腰につけてあったイスカードを僕に見せた。

あ、確かに安い。これなら買ってすぐに故障しても仕方ないと割り切れる値段かな。それにしても動きの一つ一つも可愛くて仕方がないじゃないか。

「これをどうぞ…… パンフレット、です……」

「ん、ありがと」

僕は画面の中のヒナタが差し出したパンフレットにタッチした。すると画面がパンフレットの中身に切り替わった。

ざつとパンフレットに目を通すと、ヒナタを製造した会社のコンセプトが『何もできないロボット』だということが分かった。

この会社はロボットをただの便利な道具として扱うのではなく、人間の隣で共に生きるパートナーとして考えていた。そのために便利な機能は排除して、電池寿命だけに特化したロボットを製造している。壊れやすいのもわざとで、ロボットを時に病気を患つ人間と同じように考えさせるためらしい。

……なるほど。理念として分からぬでもない気がする。どうしよう? 買っちゃおうかな? 値段も手ごろだし。何より可愛いし。ただ、炊事洗濯はどうする?

よし、決めた…… 買つちゃおひ…… 炊事洗濯くらい自分でする
れ……

後日、ヒナタが自宅に届けられた。そして一緒に暮らしだして分
かったのだが、何もできないという触れ込みのロボット。想像
以上に優秀だつた。

まるで人間のように食事もすれば、睡眠を取る。取った食事は睡
眠時間を使ってエネルギーに変えているらしい。これがあるから電
池も50年持つそうだ。エネルギー以外のものも生成されるのだが、
それはわざわざトイレに行つて排出している。

「ヒナタ。お風呂が沸いたから、先に入つていよい」と、僕が言つ
と、

「分かりました!! 先に入らせてもらいます!!」

そう言つてお風呂に向かう。防水機能も完璧だ。うーん、良い買
い物をした。

僕はヒナタがお風呂に入つている間にテレビを見ることにした。

だけど、特に見たい番組がなく、時々チャンネルを変えていたら、結局ニコース番組に落ち着いた。

ニコースは親から虐待されて逃げ出した子供たちが集まって一つの会社を立ち上げていたことを報道した。その会社名は、あれ？ ヒナタの製造会社と同じじゃないか。

「ただ今、お風呂から上がりました！！」

と、後ろからヒナタの声が聞こえてきたので、僕は慌ててテレビの電源を切った。

実はね、薄々おかしいとは思つてたんだよ。ヒナタはロボットなのに普通に髪の毛が伸びてるんだもん。

「ヒナタ、湯加減どうだった？」

「バツチリ、です！！」

「そう、それは良かった

……そり、良いんだ、これで。ヒナタは可愛いから、そんな細かいコト僕は気にしないよ。

……

いや、と言いつかね、僕はむじろこれで良かったとさえ思えるんです！！

僕は呟いた。

……この先、生きていても良いことなど何もないと悟った時、僕は死のうと思った。死に場所を求めて、樹海まで足を運んだ。だけど、僕と同じような立場の人気が他にもいることを知った。樹海の奥深く、そこに先約がいた。大樹の根元に女性の死体が横たわっていた。

季節は冬。今の樹海は凍えるように寒い。女性の死体は半分近く雪に覆われていた。僕は雪を払って硬くなっている死体を抱き起こし、大樹に寄り添わせた。

それはとても美しいものだった。女性はまだ若く、マネキンかと思わせるくらい肌が白い。肌が白いのは死んでいるせいもあるが、それにも綺麗だ。彼女がいつ死んだのかは知らないが、ここは天然の冷凍庫のようなものなので、保存状態がとてもいい。

僕は彼女の胸や太ももを服越しに撫でてみた。そうすると、これまで感じたことのない感情が沸き上がってくる。

……彼女が欲しい。素直にそう思った。抱いた欲は死に対抗する手段となり、僕はその日、自殺することなく樹海を出た。

翌日、僕は再び樹海に向かった。カバンを担いでいるが、そこには糸ノコが入っている。これで彼女を切断する。

僕はまず左手を切断して持ち帰った。冷たい樹海から持ち帰った左手はささやかな肉感を取り戻し、とても美味しそうに見えた。我慢できず、僕はそれを調理して食べた。

次の日は右手を持ち帰った。その次の日は左足を持ち帰った。僕は肅々とそれを繰り返した。そして、樹海から彼女の死体が消えた時、僕は困り果てた。まだ足りない。まだ彼女の体を欲している。欲が僕の中で暴れて、苦しい……苦しい。

そこで、僕は彼女の衣服から免許証を発見していたのを思い出した。そこから彼女の妹を見つけるに至り、その子が一人で歩いている時にスタンガンで気を失わせて、自宅に持ち帰った。

新鮮さを維持するため、すぐに殺しはしない。そのためには必要な物は用意してある。さて、まずは姉の時と同じように、彼女の左腕から頂く。

⋮⋮⋮

左腕を味わい、満足感を覚えると、僕は呟いた。

私は姉を殺した。いつも自分の比較対象であつた姉にどうとう我慢ができなくなつた。自分とは違い、綺麗で、頭が良くて、人望もある。反面、妹である私には何一つない。全てを姉に持つていがれた。姉妹なのにどうしてこんなに違う？

殺した姉は樹海の奥深くまで運んで捨ててきた。これで良い。こ

れで私は比較されることなく生きていける。

けれども、姉を殺してから数日後、私の心は何か見えないものに覆われていた。胸に、えも言われぬ圧迫感がある。

何だろう、この気持ちは？ 罪悪感？ いや、そんなのじゃない。そんなのじゃなくて、もつと違う……駄目、それが何なのかどうしても分からぬ。

私は気分転換に外に出ると買い物に行くことにした。でも、買い物には行けなかつた。突然、体に衝撃が走つて、私は氣を失つたから。

……

ここは？ ……まだ意識がはつきりしない。視界もぼんやりとしたものが見えるだけ。どこだろう、ここ？ 私、寝かされているのかな？ ……ああ、たぶん病院、かな。何か薬品っぽい匂いがするし。

あ、視界に人影のようなものが揺らいでいる。人影は私に近づくと、私の頭を撫でてこう呟いた。

「君はお姉さんと同じだよ」と。

私が姉と同じ？ そんなこと言われたことがない。比較されても私が下に置かれる。それが常だった。その一言を聞いた瞬間、胸の圧迫感がさつと引いていった。そつか、私はこの一言が欲しかつた

だけなんだ。

嬉しい。誰だろう? 「こんなことを言つてくれる人は。だんだん
視界もはつきりしてきた。もうすぐ、誰が言つてくれたのか分かる。

……ただ、どうしてだろう? 左肩の辺りが妙に痛くなつてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8589n/>

ベッドのした（短編集）

2011年3月10日17時36分発行